

学位論文審査の要旨

学位申請者	杉野 衣代 ジェンダー学際研究専攻 2016年度生		論文題目	住宅弱者の生活再建における可視化しづらい困難 —DV被害者とホームレス経験者の事例から—
審査委員	主 査:	石井クンツ昌子 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	西村 純子 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	棚橋 訓 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	マルセロ・デアウカンタラ 准教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	大橋 史恵 准教授		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (社会科学) (Ph. D. in Sociology)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
				<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本研究の目的は、DV被害者やホームレス経験者がどのように居住不安定な状況に陥り、その後、新たな住まいを得て生活を再建していくのかのプロセスを明らかにすることである。データは当事者へのインタビューと参与観察により収集された。DV被害者に関しては母子世帯向けシェア住居に2ヶ月程度の住み込みを2回実施して、被害者3名と大家あるいは管理人2名へインタビュー調査を行った。また、DV被害者ではないシェアハウス居住者2名にも調査に協力してもらった。ホームレス経験者に関しては、「ハウジングファースト」を実践するホームレス支援団体における参与観察と当事者5名と支援スタッフ4名へのインタビューからデータを収集した。分析手法は「生きられた経験」の個別性を重視するナラティブ・アプローチを用いた事例分析であるが、この分析を通して当事者の生活史と生活再建過程をホリスティックに把握した。

主な結果として、DV被害者については、住まいを失った後、借入金を抱えたり、孤立したりなどのマイナスからのスタートとなる場合が多く、生活を安定するには仕事と育児と住まいの確保が必要であるが、このプロセスには時間がかかることが明らかになった。ホームレス経験者に関しては、住まいを失った後に、寮付きの職場やネットカフェなどの不安定な状況を転々とし最終的にホームレス状態になることがわかった。更に、ホームレス状態から自力で住まいを入手するのは困難であるが、アパートを得て生活を再建した後も社会に統合される意欲が削がれていることが多かった。

本審査委員会は2019年12月17日と2020年1月29日の2回開催された。第1回審査委員会においては、記述と論述が簡潔過ぎること、社会的弱者ではなく住宅弱者の研究として定位すること、政策事例の紹介だけではなく先行研究もより多く取り上げること、「公的支援制度」を利用する人びとと本研究の対象者との差異、アクションリサーチの妥当性、先行研究と比較しての本研究の位置付け、フィールドワークの記述が十分ではないこと、ラベリング理論の使い方、分析に基づいた結論になっていないことなどが指摘され、修正や加筆が求められた。審査委員の指摘に忠実に対応して大幅な修正・加筆を行った結果、再提出された論文はかなりの改善が見られたと判断された。

審査委員会は、先行研究の蓄積が十分ではない住宅弱者に注目して、DV被害者とホームレス経験者の生活再建のプロセスを明らかにしたこと、インタビューに加えて住み込みや参与観察などにより当事者や支援者の「生の声」のデータを収集したことはかなり独創的であると評価した。公開審査会は2020年2月27日に開催され、発表はよく整理され、多くの質問に対して申請者は適切に応答した。最終審査会では、本論文が、本学大学院人間文化創成科学研究科の博士の学位水準に達していることを認め、合格とし、博士(社会科学)Ph.D. in Sociologyの学位を授与することを全員一致で決定した。